

「気象予報士試験「問題と正解」(令和元年度第2回試験(通算第53回))」の正誤表

「気象予報士試験「問題と正解」(令和元年度第2回試験(通算第53回))」に記載した資料に以下の誤りがありましたので、お詫びして訂正します。

2020年7月

訂正箇所	(正)	(誤)
P52 参考図	気象レーダーによる観測の <u>概要</u>	気象レーダーによる観測の概

2020年8月

訂正箇所	(正)	(誤)
P76 1行目から	空振り率：空振り率は、 <u>事例全数に対する、あるいは予報「現象あり」の事例数に対する空振り(予報「現象あり」、実況「現象なし」)の割合である。最小値0に近いほど空振りが少ないことを示し、次式で定義される。この解説では事例全数に対する割合で説明する。</u> 空振り率 $\equiv \frac{FX}{N}$ ($0 \leq$ 空振り率 ≤ 1)	空振り率：空振り率は、予報「現象あり」の事例数に対する空振り(予報「現象あり」、実況「現象なし」)の割合である。最小値0に近いほど空振りが少ないことを示し、次式で定義される。 空振り率 $\equiv \frac{FX}{(FO + FX)}$ ($0 \leq$ 空振り率 ≤ 1)
P76 5行目から	見逃し率：見逃し率は、 <u>事例全数に対する、あるいは実況「現象あり」の事例数(M=FO+XO)に対する見逃し(実況「現象あり」、予報「現象なし」)の割合である。最小値0に近いほど見逃しが少ないことを示し、次式で定義される。この解説では事例全数に対する割合で説明する。</u> 見逃し率 $\equiv \frac{XO}{N}$ ($0 \leq$ 見逃し率 ≤ 1)	見逃し率：見逃し率は、実況「現象あり」の事例数(M=FO+XO)に対する見逃し(実況「現象あり」、予報「現象なし」)の割合である。最小値0に近いほど見逃しが少ないことを示し、次式で定義される。 見逃し率 $\equiv \frac{XO}{M}$ ($0 \leq$ 見逃し率 ≤ 1)
P76 16行目	予報区Aの降水の有無の適中率 $=\frac{(2+1)}{5}=0.6$	予報区Aの降水の有無の適中率 $=\frac{(1+2)}{5}=0.6$
P76 17行目	予報区Bの降水の有無の適中率 $=\frac{(1+2)}{5}=0.6$	予報区Bの降水の有無の適中率 $=\frac{(2+1)}{5}=0.6$

2020年9月

訂正箇所	(正)	(誤)
P32 上 16 行目	$\theta_e = \theta \exp\{(L w_s)/(C_p T_{\underline{L}})\}$	$\theta_e = \theta \exp\{(L w_s)/(C_p T)\}$
P32 上 18 行目	C _p : 空気の定圧比熱、 <u>T_L</u> : 空気塊の持ち上げ凝結高度における温度である。	C _p : 空気の定圧比熱である。
P32 上 19 行目	$\exp\{(L w_s)/(C_p T_{\underline{L}})\}$	$\exp\{(L w_s)/(C_p T)\}$